

# 転写繰り上げ構文と有標性\*

小泉 直

## 1. はじめに

英語には、(1)のように、名詞句が不定詞節の主語の位置から主節の主語の位置へ繰り上がることによって生成される構文、いわゆる主語から主語への繰り上げ構文(subject-to-subject raising construction)が存在する。

(1) The lifeguards seem to be dancing across the water.

(Kim 2014: 167)

英語には、また、(2)のように、(1)と同義でありながら主節の主語位置に虚辞の *it* が現れる構文も存在する。

(2) It seems that the lifeguards are dancing across the water.

(Kim 2014: 168)

英語には、さらに、(3)と(4)のように、同じ繰り上げ述語が用いられながら補文標識として *like* (あるいは *as if*, *as though*) が現れる構文も存在する。<sup>1</sup>

(3) The lifeguards<sub>i</sub> seem like they<sub>i</sub> are dancing across the water.

(Kim 2014: 167)

(4) It seems like the lifeguards are dancing across the water.

(Kim 2014: 168)

本稿では、Potsdam and Runner (2001)に従って、(3)に例示される構文を転写繰り上げ構文(copy raising construction)、以下略して CR 構文と呼ぶことにする。

生成文法の初期の頃、CR 構文は補文の主語を主節の主語位置へ繰り上げるとともに、補文の主語位置に同一指示の代名詞を残す *Richard* と呼ばれる変形規則によって生成されると仮定されていた (Rogers (1971, 1972, 1974a, 1974b)参照)。しかし、*Richard* という変形規則が多くの理論的・経験的問

題を抱えることから、現在では RC 構文はその表層形式のまま直接基底で生成されるという考え方が主流となっている（最初の基底生成分析については Lappin (1983)を参照）。以下、2節では Richard という規則の問題点を指摘し、続いて3節では RC 構文に対する最近の分析として Landau (2011)と Kim (2014)を取り上げ、その概要を紹介するとともに、問題点について考察する。最後に4節では RC 構文に現れる非指示的要素の特徴について論ずる。

## 2. Richard の問題点

### 2.1. 理論的問題点

Kim (2014)は Richard に少なくとも3つの理論的な問題があると指摘している。1つは Richard が定形の埋め込み節の主語という格付与される位置からの項移動を含むということである。このような移動は時制文内にある要素をその外にある要素と関係づけることはできないという時制文制約 (Tensed-S condition)に違反することになる。もう1つは主題役割の付与に関するもので、埋め込み節の主語位置を有形の代名詞が占めるとすると、主節の主語位置の名詞句はどこから主題役割を付与されるのかという疑問が生じることになる。さらにもう1つは移動後に同一指示の代名詞を残すという操作はあまりにも強力であり、現在の理論的枠組みでは到底容認されない。

### 2.2. 経験的問題点

Kim (2014)等が指摘するように、CR 構文では、同一指示の代名詞が現れる位置は、(3)のような補文の主語位置に限定されるわけではない。(5)から(7)に示すように、代名詞は補文の主語の指定辞位置、動詞の目的語位置、前置詞の目的語位置にも現れる。<sup>2</sup>

(5) a. The girl seemed as if **her mom** was dying.

(COCA 2001 FIC)

b. The judge looked as if **his candy** had been stolen.

(COHA 1951 FIC)

(6) a. The Peugeot appeared as if dust had created **it**.

(COCA 2002 ACAD)

b. The lawn looked as if someone had brushed **it**.

(COCA 1993 MAG)

(7) a. ...,till the forest appears as if a tornado had passed over **it**, ...

(COHA 1850 MAG)

b. The cabinets looked as though someone had thrown the pots into **them** from across the room.

(COCA 1998 MAG)

また、(8)に示すように、補文の主語は主節の主語の指定辞と同一指示のこともある。

(8) a. His voice seemed as if **he** shouted all night.

(COCA 2007 FIC)

b. His face looks as though **he** has emptied himself of every thought.

(COCA 1991 NEWS)

さらに、(9)に示すように、補文に主節の主語と同一指示の代名詞が現れないこともある。

(9) a. For me, studying Yiddish seemed as though I were traveling, instead, through the streets of a long-forgotten hometown.

(COCA 2000 ACAD)

b. Domestic in scale but collapsed in volume, they look as if air had been blown in and then sucked out.

(COCA 2003 MAG)

そのため、(5)から(8)に関しては Richard の適用条件を複雑化する等して対応する必要が生ずる。また、(9)は Richard という規則の存在自体に疑問を投げかけることになる。

### 3. 最近の分析

#### 3.1. Landau (2011)の分析

Landau (2011)は、CR 構文に(9)のような同一指示の代名詞が現れない例が観察されるという事実を説明するために、(10)のような知覚の源 (perceptual source)に関する条件を提案している。

(10) The P-source-Copy Generalization (PCG)

Given a sentence "DP<sub>i</sub> V<sub>perc</sub> (to DP<sub>j</sub>) *like* CP",

Where  $V_{\text{perc}} \in \{\textit{seem}, \textit{appear}, \textit{look}, \textit{sound}, \textit{feel}, \textit{smell}, \textit{taste}\}$ :

A copy (= pronoun coindexed with  $DP_i$ ) is necessary in CP

iff  $DP_i$  is not a P-source.

この条件は、もし CR 構文において主節の主語が知覚の源として機能しなければ、補文(CP)の中に同一指示の代名詞が現れなければならないということを示したものである。この条件がどのように働くのかを見るため、次の例を考えてみよう。

(11) a. Your house sounds like nobody enjoys cleaning \*(it).

b. That noise sounds like somebody's cleaning.

(Landau 2011: 801)

(11)では、主節と補文で使われている動詞は同じであるが、(11a)では代名詞の *it* が現れなければならないのに対し、(11b)では代名詞の *it* が現れなくてよい。Landau は、このような相違が生じるのは、(11b)における主節の主語 *that noise* が補文で表されている出来事を推論させるための知覚の（この場合は聴覚の）源として機能しているのに対し、(11a)における主節の主語 *your house* が知覚の源として機能していない（例えば、(11a)は喫茶店等で交わされた会話の一部という可能性がある）からであると説明している。

しかし、Landau 自身が認めているように、PCG には少なからず反例が存在する。次の例を考えてみよう（#記号は語用論的に変則であることを表す）。

(12) a. #Bill appears as if Mary is intelligent despite his prejudice.

b. Bill appears as if Mary is more intelligent than him.

c. Bill appears as if Mary had just said the most embarrassing thing. [e.g., in a party context, where Mary is Bill's wife]

(Landau 2011: 792)

(12)では、いずれの文においても主節の主語 *Bill* が知覚の（この場合は視覚の）源として機能している。しかし、予想に反して(12a)は容認されない。Landau は、(12a)が容認されないのは、*Bill* を見ただけでは補文で表されている状況が適切に推論できないからである説明している。したがって、CR 構文が容認されるためには、PCG だけでなく解釈の適切性に関する語用論的条件も満たさなければならないことになる。

### 3.2. Kim (2014)の分析

Kim (2014)は、Landau (2011)の提案する PCG が不完全な条件であることから、主節の主語の機能が補文における同一指示の代名詞の出現を決定するという考え方に否定的であるが、主節の主語が知覚の源として機能しているという見解には賛同し、代案として次のような条件を提案している。

#### (13) P-source Condition:

The matrix subject of the CR needs to serve as the (psycho- logical) source of perception (P-source) in the eventuality involved.

Kim は、P-source Condition が以下のような例において動詞を選択するのに有効であると論じている。

- (14) a. This noise seems/appears/sounds/\*feels/\*looks/\*tastes like  
Eric is responsible for the production.  
b. The moon seems/appears/looks/\*feels/\*sounds/\*tastes like the  
orbit is nearly circular.  
c. This book ?appears/?seems/sounds/looks/??feels/??smells like  
everyone should own a copy.

(14a)では、騒音を聞いて、知覚者は Eric が生産に責任があることを推論することはできるが、騒音は体で感じたり見たり味わったりすることができない。(14b)では、月を見ることで、その軌道を推論することはできるが、軌道を体で感じたり聞いたり味わったりすることはできない。(14c)のような本を話題にしている文脈で最も自然な動詞は sound か look であるが、本を持ったり嗅いだりしているような場面では feel や smell も容認される可能性がある。

Kim は、また、CR 構文では主節の主語が定(definite)もしくは総称的(generic)名詞句だけに限られ、(15)に見るような不定(indefinite)名詞句が許されないことから、

- (15) a. \*A lifeguard seems like he or she is dancing across the  
river.  
b. \*A girl seems like she is laughing hysterically.

CR 構文における主節の主語は話題もしくは既知情報として機能する一方で、

文の残りの部分は評言もしくは新情報として機能すると結論づけている。<sup>3</sup>そして、この結論に基づいて、CR 構文が容認されるためには次のような条件も満たさなければならないと主張している。

(16) CR's Perceptual Characterization Condition (PCC):

The matrix subject of the CR construction, serving as the topic, is “perceptually characterized” by the rest of the utterance.

PCC は、補文の内容が主節の主語を特徴づけるものでなければならないということを述べたものである。<sup>4</sup>Kim は、この条件によって、次のような例が容認不可能であることが説明できると論じている。

(17) a. \*Bill appears as if Mary is intelligent. (Lappin 1984: 240)

b. \*Tina seems/appears like/as if/as though Chris has been baking sticky buns. (Asudeh and Toivonen 2012: 325)

(17a)では、Mary が聡明であることは Bill を特徴づけるのに役立っていない。(17b)でも、Chris がハニーバンを焼いていたことは Tina を特徴づけるのに役立っていない。Kim は、また、PCC によって、次のような同一指示の代名詞の現れていない CR 文がなぜ容認可能であるのかについても説明できると論じている。

(18) a. “The house smells like you’ve been cooking all day”, says

Duggan. (COCA 2006 NEWS)

b. The entire scene appears as if the Creator himself had wished it to be so. (COCA 1992 FIC)

c. Things appear as if you were standing at a window or in front of a view. (COCA 2004 MAG)

(18a)では、あなたが一日中料理していたことが家の特徴づけるのに役立っている。(18b)では、創造主が自ら望んだことが景色全体の特徴づけるのに役立っている。(18c)では、あなたが窓や風景の前に立っていたことが状況を特徴づけるのに役立っている。

Kim は、さらに、CR 構文では同一指示の代名詞が補文の主語位置に現れる傾向が強いが、それはなぜかという疑問に対して、Ariel (1990)の提唱する「聞き手にとっての指示物への接近可能性」という概念を利用して、次のよ

うな階層構造を提案している。

(19) subject > specifier of the subject > (prepositional) object > context-provided inferred individual

一般的に聞き手にとって指示物を最も同定しやすいのは主語である。Kim は、そのため CR 構文でも同一指示の代名詞は補文の主語位置もしくはその指定辞位置に現れる傾向が強いと説明している。

Kim の分析は、CR 構文では主節の主語が知覚の源として機能するだけでなく特徴づけの条件も満たさなければならないと仮定したことによって、従来の分析よりも説明力が格段に向上していると言える。しかし、それにもかかわらず、少なくとも2つの問題があると思われる。1つは(19)の階層構造の信憑性に疑問があるということである。British National Corpus (以下、BNC)で同一指示の代名詞が補文のどの位置に現れるのかを調査してみると、(20)の表のような結果が得られる。なお、この表におけるアルファベットは(21)に示すような種別を表す。

(20) CR 文の動詞別出現数

	A	B	C	D	E	F	G	計
appear	12	0	0	0	1	3	1	17
seem	34	1	0	0	4	3	4	46
smell	3	0	0	0	0	6	0	9
taste	5	0	3	0	0	2	0	10
sound	207	5	7	1	4	47	6	277
feel	677	47	120	19	3	107	14	987
look	1,210	14	55	7	5	72	50	1,413
計	2,148	67	185	27	17	240	75	2,759

- (21) A: 主語位置に現れている例  
 B: 主語の指定辞位置に現れている例  
 C: 動詞もしくは前置詞の目的語位置に現れている例<sup>5</sup>  
 D: その他の位置に現れている例<sup>6</sup>

E: 補文の主語と be 動詞が省略されている例<sup>7</sup>

F: 同一指示の代名詞が現れていない例

G: 分類が困難な例

(20)の表から、CR 構文ではAが圧倒的多数で全体の8割近くを占め、次に多いのがFであることがわかる。<sup>8</sup>そうすると、少なくとも(20)の表に基づく限り、実態は(19)ではなく(22)の階層構造を成していることになる。

(22) subject > context-provided inferred individual > (prepositional)  
object > specifier of the subject

その結果、CR 構文では同一指示の代名詞がなぜ補文の主語位置に現れる傾向が強いのかという疑問に対する答えとして「接近可能性」という概念が本当に妥当であるのか再考する必要が生じることになる。

Kim の分析のもう1つの問題は、CR 構文の主節の主語位置に非指示的要素が現れるということである。次の例を考えてみよう。

(23) a. It looks like there is going to be a riot.

b. There looks like there is going to be a riot.

(Rogers 1972: 307)

(24) a. It looks like the shoe is on the other foot.

b. The shoe looks like it is on the other foot.

(Rogers 1972: 308)

(25) a. It looks like the cat is out of the bag.

b. The cat looks like it is out of the bag.

(Rogers 1972: 308)

(23b)では虚辞の *there*、(24b)と(25b)ではイディオムの要素が主節の主語位置に現れている。いずれの要素も指示機能をもたないことから、特徴づけの対象とならない。<sup>9</sup>それゆえ、これらの例は PCC を満たさないことになり、容認不可能となるはずである。しかし、事実は逆である。

#### 4. 非指示的要素

CR 構文における非指示的要素に関して不可解なことは、事実自体はすで



に Rogers (1972)によって指摘され、その後も何人かの文法家によって言及され、Kim (2014)自身もこの事実を取り上げておきながら何の解決策も示されていないということである。本稿では、主語位置に非指示的要素が現れている例（以下、非指示的例）は CR 構文において周辺のなものであると仮定し、それを支持する証拠を幾つか挙げることにする。

まず、非指示的例は話者によって文法性の判断に揺れが見られる (Potsdam and Runner (2001)、Asudeh (2002)、Landau (2009, 2011)、Asudeh and Toivonen (2012)、Kim 2014) 等参照)。次の例を考えてみよう (%は方言差があることを表す)。<sup>10</sup>

(26) a. %There looks like there's gonna be a riot.

b. %There seem like there are problems.

(Potsdam and Runner 2001: 455)

(27) a. %The shoe looks like it's on the other foot.

b. %The shit appears as though it's going to hit the fan very soon. (ibid.)

(28) a. %Exception seems like it was taken to the recounting of votes

b. %Advantage appears like it was taken of the workers.

(ibid.)

一般的に判断に揺れがあることは周边的であることの証拠と考えられている。例えば、右節点繰り上げ構文(right node raising construction)でも、右側に現れる共通要素が単一の構成素でなければならないとされているが、

(29) a. Jack may be—and Tony certainly is—a werewolf.

b. Tom said he would—and Bill actually did—eat a raw eggplant.

c. Tony should have—and Pete probably would have—called Grace.

(Postal 1974: 126)

(30) a. \*John gave—but Bill didn't give—a present to Mary.

b. \*John sent—but Bill didn't send—Mary a present.

c. \*John persuaded—but Mary couldn't persuade—Bill to leave.

(Grosu 1976: 643)

右側に現れる要素が複数個存在し、しかもそれらの要素が相互に姉妹関係にない場合は話者によって容認可能性の判断が異なる ((\*は個人差があることを表す)。

- (31)a. (\*) John has sliced—and Mary also seems to have sliced—a large piece of cake with a shining new knife.  
b. (\*) Bill may present—and Mary certainly will present—a series of papers at tomorrow’s linguistic meeting.  
c. (\*) Mary may have conducted—and Bob certainly has conducted—a number of tests in the large oval lab.

(Grosu 1976: 643-644)

次に、非指示的例では、(32)と(33)に示すように、非指示的要素が補文の主語位置以外に現れると容認可能性が著しく低下する。

- (32) a. %There seems like there is expected to be an election.  
b. \*There seems like John expects there to be an election.

(Landau 2011: 800)

- (33) a. %The shoe appears like it is on the other foot.  
b. \*The other foot appears like the shoe is on it. (ibid.)

一般的に有標なものと同有標なものが組み合わさると容認可能性が低くなることが知られている。例えば、疑問文に間接疑問縮約規則(Sluicing)を適用した場合、(34a)のような例に加えて(34b)のように前置詞が残留する例も可能であるが、(35)のように DP の指定辞が wh 化された例は容認されない。

- (34) a. John met someone, but I don’t know *who*.  
b. John left, but I don’t know *who with*. (八木 1984: 246)  
(35) \*John left, but I don’t know *which people with*. (ibid.)

八木 (1984)は、前置詞が残留する(34b)の方が(34a)より有標であり、しかも DP の指定辞の wh 化は文の主語・目的語の wh 化より有標であるので、(35)が容認されないのは有標なもの同士が組み合わさった結果であると説明している。

(22)の階層構造からわかるように、CR 構文では同一指示の代名詞が補文の主語位置に現れる例が無標であり、それ以外の位置は有標である。そのため、

(32b)と(33b)が容認されないのは、もともと有標である非指示的例に主語以外の位置という有標的な要因が加わったためであると考えられる。

最後に例(36)を見てみよう。

- (36) a. It looks like there is going to be a riot. (=23a)  
b. There looks like there is going to be a riot. (=23b)  
c. \*There looks like it is going to be a riot.

(Rogers 1972: 307)

すでに(26a)で示したように、(36b)の容認可能性は話者によって異なるが、Kobayashi (1994)は(36b)を容認する話者はすべて(36b)よりも(36a)の方が自然であると判断すると報告している。このことは(36b)が(36a)よりも有標であることの更なる証拠になると思われる。

以上、非指示的例が CR 構文における有標な変種であることを論証してきたが、それではなぜ非指示的例が CR 構文に存在するのであろうか。それは、非指示的例が主語から主語への繰り上げ構文における次のような例の影響（例えば、類推作用）を受けて派生的に文法に導入されるからであると考えられる。

- (37) a. *There* seems to be trouble in the Congo.  
b. *The shit* seems to be about to hit the fan. (on idiomatic reading.)  
c. *The jig* seems to be up. (on idiomatic reading)  
d. *Little heed* seems to have been paid to my suggestion.

(Postal 1974: 34)

では、なぜ CR 構文が主語から主語への繰り上げ構文の影響を受けるのであろうか。この点に関しては(38a)の主語から主語への繰り上げ構文と(39a)の CR 構文との比較が答えを与えてくれると思われる。

- (38) a. John seems to be in trouble.  
b. It seems that John is in trouble.  
(39) a. John seems like he is in trouble.  
b. It seems like John is in trouble.

2つの構文を比べると、次の点でよく似ている

- (40) a. 主節で使用される動詞の種類が部分的に重複する（具体的には *seem* と *appear*）。
- b. 補文が不定詞か定形かを除けば表面的な語の配列が類似している。
- c. 主節主語が話題であり、補文がそれに対する評言となっている。
- d. 虚辞の *it* が現れる構文に書き換え可能である。

このような類似性から CR 構文が主語から主語へ繰り上げ構文の影響を受けたとしても不思議はないと考えられる。

上記の仮説が正しいとすると、非指示的例は2つ構文の主節で使用される動詞の中で重複する動詞、つまり *seem* と *appear* とともに現れる可能性が高いであろうと予測される。そこで、*there* が主語位置に現れる例を COCA で調べてみると(41)のような結果が得られる。

(41) *there* が主語位置に現れる例の動詞別出現数

<i>seem</i>	<i>appear</i>	<i>feel</i>	<i>look</i>	<i>smell</i>	<i>sound</i>	<i>taste</i>
8	0	0	5	0	2	0

(41)では予測通り *seem* に現れる例が最も多いが、圧倒的に多いという印象は得られない。しかし、ここで注意すべきは、CR 文はどの動詞とともに使われることが多いのかである。そこで、BNC で CR 文の動詞別出現数を調べてみると(42)のような結果が得られる ((40)の表を参照)。

(42) CR 文の動詞別出現数

<i>seem</i>	<i>appear</i>	<i>feel</i>	<i>look</i>	<i>smell</i>	<i>sound</i>	<i>taste</i>
46	17	987	1,413	9	277	10

(42)から CR 文は *look* とともに使われることが最も多く、*seem* の約 30 倍である。このような事実を考慮に入れながら(41)をもう一度検討してみるならば、*there* は *seem* とともに使われる傾向が極めて強いと言って差し支えないと思われる。

## 5. おわりに

本稿では、CR 構文の生成に関してこれまでに提案されてきた分析を概観

するとともにそれらの分析が抱える不備について考察した。その結果、現時点において最も見込みがあると思われる Kim (2014)の分析においてでさえ克服すべき問題が幾つかあることが判明した。本稿では、非指示的例に関しては一定の解決策を提案したが、それ以外の問題をどのように解決すべきかについては稿を改めて論ずることにする。

## 注

\*本稿は小泉(2016)の内容の一部を加筆修正したものである。また、本稿の内容は第7回意味論研究会（於：静岡県立大学、2019年12月21日）において口頭発表している。研究会において貴重なコメントをくださった方々に感謝の意を表したい。

1 Heycock (1994)と Potsdam and Runner (2001)はこの構文に現れる like を前置詞と見なしている。また、Asudeh (2002, 2012)と Asudeh and Toivonen (2012)は like だけでなく as も定形節 (if 節あるいは though 節) を補部として取る前置詞であると見なしている。さらに、Kobayashi (1994)は like, as if, as though すべてを前置詞と仮定している。一方、Kim (2014)は、(i)に示すように、if 節と tough 節が等位接続や繰り返しを許さないことから、as if と as though は単一の複合語であり、like も含めてこれらは補文標識であると仮定している。

(i) a. \*Prince seems as [if he has got everything] and [if he knows everybody].

b. \*It seems as [though he's got everything] and [though he knows everybody].  
(Kim 2014: 178)

本稿では、like, as if, as though の範疇上の資格が何であれ、それが以下の議論に影響を与えることがないので、この問題には立ち入らないことにする。

2 (5)から(9)までの例は Kim (2004)から引用であり、COCA は Corpus of Contemporary American English、COHA は Corpus of Historical American English の省略形である。

3 同様の事実の指摘は他の文献にも見られる。以下の例を参照されたい。

(i) a. \*A man seems as if he is happy.

- b. ?Some man seems as if he is happy. (Lappin 1984: 250)
- (ii) ??Any doctor seems like she/he knows the answer.  
(Davidson 1984: 816)

(iii)は総称的な質量名詞と複数普通名詞の例である。  
(iii) a. Snow seems as if it is white in normal light.

b. Cows seem as if they are lethargic to the casual observer.

(Lappin 1983: 125)

CR 構文は、また、「話題・評言」の関係を表す点で話題化構文や左方転移構文に似ているが、井上 (2002)は、文中に同一指示の代名詞が生起する点や、(iv)と(v)に示すように、複合名詞句制約(complex NP constraint)と左枝分かかれ条件(left-branch condition)に従わない点で、話題化構文よりも左方転移構文に近いと論じている。

(iv) a. \*That proposal<sub>i</sub>, the man who made <sub>t<sub>i</sub></sub> must have been crazy.

b. That proposal<sub>i</sub>, the man who made it<sub>i</sub> must have been crazy.

c. That proposal<sub>i</sub> seems as if the man who made it<sub>i</sub> must have been crazy.

(井上 2002: 73-74)

(v) a. \*His wife<sub>i</sub>, somebody stole [<sub>t<sub>i</sub></sub> handbag] last night.

b. His wife<sub>i</sub>, somebody stole her<sub>i</sub> handbag last night.

c. His wife<sub>i</sub> looks as if somebody stole her<sub>i</sub> handbag last night.

(井上 2002: 74)

4 特徴づけという概念は、もともと Takami (1992)において疑似受動文や tough 構文の容認可能性を決定するための条件として提案されたものである。例えば、Takami (1992)では、疑似受動文に関する特徴づけの条件が次のように定義されている。

- (i) Characterization Condition for Pseudo-Passives: A pseudo-passive sentence is acceptable if the subject is characterized by the rest of the sentence: namely, if the sentence as a whole serves as a characterization of the subject. Otherwise, it is found unacceptable, or marginal at best.

この条件がどのように働くのかを見るため、次の例を考えてみよう。

(ii) a. \*I was waited for by Mary.

b. I don't like to be waited for. (I always try to be early.)

(Takami 1992: 127)

(iii) a. \*The office was worked in.

b. This office has never been worked in before.

(Takami 1992: 127)

(ii)と(iii)では、それぞれ使われている動詞と前置詞が同じであるが、(iia)と(iiii)が容認不可能で、(iib)と(iiiib)が容認可能である。この相違は(i)の条件によって説明することができる。(iia)のように、ある時間に Mary が私を待っていたという事実は私という人物を特徴づけるのに役立たない。しかし、(iib)では、私の特徴が明確に述べられている。つまり、(iib)から、私が遅刻することで他人を待たせるのを好まない人間であることがわかる。同様に、(iiii)のように、誰かがその事務所で働いていたという事実はその事務所の特徴づけるのに役立たないが、(iiiib)では、その事務所の特徴が明確に述べられている。つまり、その事務所は以前誰も働いたことがないことから、新設されたものであることがわかる。

5 以下に例示するように、Cには同一指示の代名詞が目的語の指定辞位置に現れている例も含めている。

(i) They'll feel like I've taken my ball back and spoiled their game.

(BNC H8M 2174)

(ii) Shiona felt as though a bomb had gone off in her face.

(BNC JXS 3209)

6 以下に例示するように、Dには同一指示の代名詞が埋め込み節内、副詞節内、be 動詞の補部位置等に現れている例が含まれる。

(i) She sounded as if Claudia would know what she was talking about.

(BNC H8J 1091)

(ii) The letters lying there on the mat didn't exactly look as though if I didn't open them the world would stop.

(BNC B38 345)

(iii) I feel as though he might be my own child. (BNC HD7 114)

7 これらの例は省略されている主語が主節の主語と同一指示的であることから、Aに含めてもよいかもしれない。

8 動詞 feel は他の動詞に比べてCが占める割合が高い。これは feel に外界につい

ての知覚（外部感覚）を表す用法に加えて、自分の心身の状態についての知覚（内部感覚）を表す用法もあるからであろう（Leech (2004<sup>3</sup>)参照）。

9 虚辞の *there* は非項(non-argument)であるが、天候の *it* とイディオムの要素は準項(quasi-argument)であり、指示機能をもたない一方で、(i)に示すように、指示代名詞の先行詞になれる。

- (i) *it<sub>i</sub> sometimes rains before it<sub>i</sub> snows*
- (ii) *care<sub>i</sub> was taken of the orphans, but it<sub>i</sub> was insufficient*  
(Chomsky 1981: 327、指標づけは筆者)

10 実際、Horn (1981)は以下のような例を容認しているが、

- (i) a. *There looks like there's going to be a riot.*
- b. *The cat sounds like it's out of the bag.*
- c. *The shoe looks like it's on the other foot now.*
- d. *The shit looks like it's about to hit the fan.*

(Horn 1981: 355)

Lappin (1983)は CR 構文の主節の主語位置にイディオムの要素が現れないとして、次の例を挙げている。

- (ii) a. *\*Advantage seems/appears as if it had been taken of John.*
- b. *\*Much headway seems/appears as if it had been made on the project.*

(Lappin 1983: 123)

また、Davidson (1984)は、虚辞の *it* と *there* は現れるがイディオムの要素は現れないとして、次の例を挙げている。

- (iii) a. *It looks like it's going to rain.*
- b. *There looks like there's going to be a riot.*

(Davidson 1984: 816)

- (iv) a. *??Tabs seem like they're being kept on Susan*
- b. *?John's goose looks like it's finally been cooked after last weekend.*

(ibid.)

- (v) a. *It smells like some headway is being made in the kitchen.*
- b. *??Some headway smells like it's being made in the kitchen.*

(ibid.)



## 参考文献

- Ariel, Mira. 1990. *Accessing Noun-Phrase Antecedents*. London and New York: Routledge.
- Asudeh, Ash. 2002. "Richard III," *CLS* 38, 31-46.
- Asudeh, Ash. 2012. *The Logic of Pronominal Resumption*. Oxford: Oxford University Press.
- Asudeh, Ash and Ida Toivonen. 2012. "Copy Raising and Perception," *Natural Language and Linguistic Theory* 30, 321-380.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Davidson, Alice. 1984. "Syntactic Markedness and Definition of Sentence Topic," *Language* 60, 797-846.
- Grosu, Alexander. 1976. "A Note on Subject Raising to Object and Right Node Raising," *Linguistic Inquiry* 7, 642-645.
- Heycock, Caroline. 1994. *Layers of Predication: The Non-Lexical Syntax of Clauses*. New York: Garland Publishing Co.
- Horn, Laurence R. 1981. "A Pragmatic Approach to Certain Ambiguities," *Linguistics and Philosophy* 4, 321-358.
- 井上徹. 2002. 「seem as if 構文の有標性について」『英語語法文法研究』第9号, 63-79.
- Kim, Jong-Bok. 2014. "English Copy Raising Constructions: Argument Realization and Characterization Condition," *Linguistics* 52, 167-203.
- 小泉直. 2016. 「英語の転写繰り上げ構文について」『外国語研究』第49号, 1-15.
- Kobayashi, Keiichiro. 1994. "A Small Clause Analysis of *As If* Constructions," 『英文学研究』第70巻第2号, 171-191.
- Landau, Idan. 2009. "This Construction looks like a Copy is Optional," *Linguistic Inquiry* 40, 343-346.
- Landau, Idan. 2011. "Predication vs. Aboutness in Copy Raising," *Natural Language and Linguistic Theory* 29, 779-813.
- Lappin, Sharon. 1983. "The  $\theta$ -Roles and NP Movement," *NELS* 13, 121-128.

- Lappin, Sharon. 1984. "Predication and Raising," *NELS* 14, 236-252.
- Postal, Paul M. 1974. *On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Potsdam, Eric and Jeffrey T. Runner (2001) "Richard Returns: Copy Raising and its Implications," *CLS* 37, 453-468.
- Leech, Geoffrey. 2004<sup>3</sup>. *Meaning and the English Verb*. London: Pearson.
- Rogers, Andy. 1971. "Three Kinds of Physical Perception Verbs," *CLS* 7, 206-222.
- Rogers, Andy. 1972. "Another Look at Flip Perception Verbs," *CLS* 8, 303-315.
- Rogers, Andy. 1974a. "A Transformational Constraint on Richard?" *CLS* 10, 551-558.
- Rogers, Andy. 1974b. *Physical Perception Verbs in English: A Study in Lexical Relatedness*. Doctoral dissertation, UCLA.
- Takami, Ken-ichi. 1992 *Preposition Stranding: From Syntactic to Functional Analysis*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 八木孝夫. 1984. 「統語論の有標性理論」『言語』 1月号, 138-148.

#### コーパス

BNC: The British National Corpus

COCA: Corpus of Contemporary American English

COHA: Corpus of Historical American English